

「亡くなった妹は戦争の犠牲者」

永山 夫至子 （82歳）

私は1938年（昭和13年）2月11日に、大阪市港区八幡屋宝町で生まれました。1944年（昭和19年）、国民小学校1年生です。登校すると先生が、昨日はお友達が二人亡くなったと、毎日報告です。私の家の庭には防空壕があり、空襲警報が鳴ると家族全員慌てて入り、縮こまっていました。入口にはB29が落とした焼夷弾の火の粉が大雨の様に降り注ぎ、生きた心地がしませんでした。またある時は、朝になって外に出てみると、電線に布団や毛布が引っかかっているのを見ました。恐ろしくなって飛んで帰りました。窓にはテープを貼り、カーテンは真っ黒にしました。

やがて国の強制で疎開することになりました。父の実家がある徳島に疎開しました。私たち姉弟は七人で、私は上からも下からも四番目です。上の姉と兄は（小学校5年生、小学校6年生）香川県のお寺に学童疎開していました。そこへ父が迎えに行きました。母は残った子どもたちを連れて、天保山から船に乗り徳島県海部郡牟岐町菟来に行きました。父の実家です。船は満員で階段に立ったまま、小学校2年生の兄が一歳の妹をおんぶし、母は2歳の弟を抱っこしていました。私は子どもながらに、兄が可哀想でたまりませんでした。

父の実家には少し世話になっていましたが、すぐ出ました。近くの煙草農家さんの煙草の葉の乾燥室、広さは12畳ぐらい、囲炉裏を作って親子9人がしばらく住んでいました。そうして今度は馬小屋です。子どもながらにつくづく嫌になり、人間が住む家に住みたいと思い、とても悲しかったことを覚えています。その上まともな食事が食べられませんでした。

大きな釜に水をたっぷり入れ、米を少し入れてしゃぶしゃぶのお粥です。学校には弁当を持っていけませんでした。みんなが食べている時は、運動場で姉弟そろって遊んで、時間を潰していました。1945年（昭和20年）7月のある日、帰宅すると母が悲しい顔をして、妹が亡くなったと言いました。朝生きていたのに。ずっと体調が悪かったそうなんです。栄養失調でした。母はお乳が出ず、またミルクを買うお金もありませんでした。亡くなった2歳の妹は、戦争の犠牲者です。

私はこの戦争体験を書くことが辛くて、筆がすすみませんでした。本当は忘れてしまいたいのです。でも一方では、忘れては駄目だという心もあり悩みました。そして決心して書いたのがこの手記です。戦争は惨めで辛いものです。